

阿岐のまほろば

Vol. 28

町屋ギャラリー・四日市

四日市遺跡第1～5次調査 (西条本町・西条栄町)



四日市遺跡は、西条本町・西条栄町に所在する江戸時代の西国街道沿いに発展した、宿場町の町屋跡を中心にした集落遺跡です。平成10年度から西条駅前土地区画整理事業に伴って発掘調査を実施しており、今年度は第7次調査になります。調査の概要は幾度か『阿岐のまほろば』でも報告してきましたが、今回は、現在進めている整理作業によって得られた成果の一部をお伝えします。

写真1は、東広島市街地周辺の空中写真で写真右が北になります。「く」字状にJR山陽本線が走

っていますが、写真上に行くと広島方面です。ほぼ中心部が四日市遺跡で、上下に貫く細い道が江戸時代の西国街道（旧山陽道）です。この地域の風景のひとつである、赤い屋根瓦と酒蔵の煙突がよく目立っています。

第1図は、JR山陽本線西条駅前周辺の地図です。東西に貫く道が西国街道で、町並のほぼ中央部の鉤型に曲がっている場所にかつて「制札所」と「恵比寿社」がありました。



第1図 アミ目が第1～5次調査区の範囲
(①が写真2、②が写真7)

灰色に塗ってあるところが発掘調査を実施した範囲です。第1～4次調査(平成10～12年度)の場所は、街道を挟んだ南側で、第5次調査(平成13年度)は北側です。

発掘された町屋

四日市遺跡の主な時代は江戸時代で、宿場町の町屋が発掘されました。主な遺構は、礎石建物跡、井戸、埋桶・甕土坑、溝、ゴミ捨て穴、醸造遺構などです。



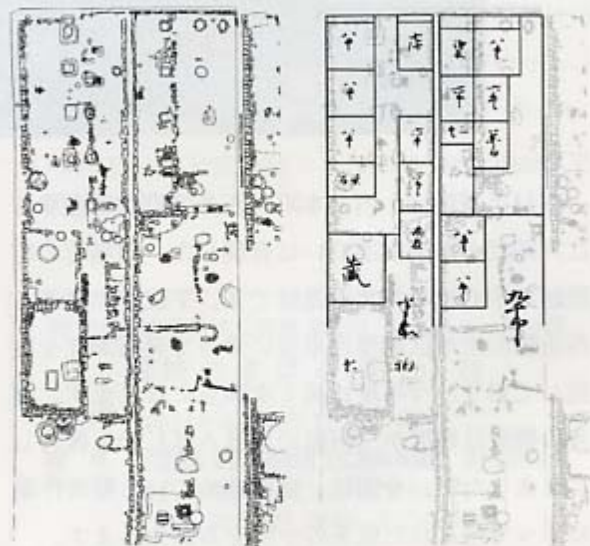
写真2 2区第1面(南から)

写真2は、第2次調査第1面の全景写真ですが、「間口が狭く、奥行きが深い」典型的な町屋の姿をしています。第2図(左)はその実測図で、(右)は「四日市街路家並絵図」(竹内家文書 広島県立文書館蔵、以下「絵図」という)の同地点の間取りを畳数に合わせてトレースして重ねてみたものです。中央を南北に縦長の排水溝が走り、礎石の位置が復元した間取りとびたり一致しました。

石組による排水溝が屋敷境を兼ねていたと考えられ、2軒の細長い建物であったことが想像できます。また、安芸地方の町屋の特色のひとつと考えられている「正面側に座敷を設け、土間が鉤の手に折れ曲がる」という平面構成もよく表しています。

「絵図」は、幕末の長州戦争の際に幕府軍が街道沿いの町に宿泊する事を考えて家々の間取りや畳数まで詳しく描かれたものなので、絵図と一致するこの礎石群は、幕末頃の建物跡と考えてよいでしょう。

一方、同じ遺構面の土坑からは、① 幕末頃、② 明治中期頃、③ 大正～昭和初期頃と概ね3時期の遺物群が出土しました。特に、溝を挟んで離れた場所から出土した遺物の破片が接合する③の頃に



第2図 「絵図」をトレースし、遺構配置図に重ねたもの

は、左右の隣りあった敷地という認識がなかったのでしょうか。

掘り出された遺物

四日市遺跡から出土する遺物の半分近くは瓦です。多いとは言うものの、江戸時代を通じて四日市全ての建物を瓦葺きにすることができる量ではありません。おそらく、時期的には江戸時代の後半以降で、搬出・再利用されたり、土蔵や建物の一部（上部とか正面）のみが瓦葺きだった可能性があります。

写真3は第5次調査で出土した鬼瓦で、幅62cm・高さ46cmです。烏帽子と鯛と釣り竿が見えますので、恵比寿様を象ったものでしょう。しかし、恵比寿様特有のニコニコ顔ではないような気がします。まるで誰かのように…。

さて、写真4は、「クド（カマド）」です。粘土を板状にして貼り合わせて作られており、瓦製作の技術が応用されているようです。この地方では、釉薬が掛けられた赤瓦（アブラ瓦）を焼いていたことは文献資料から解っていますが、江戸時代の



写真3 鬼瓦



写真4 クド（カマド）



写真5 土瓶

黒瓦（イブシ瓦）を焼いていたかどうかははっきりしません。先の鬼瓦やこのクドなどを研究することで生産地なども解るかもしれません。

写真5は、土師質土器（素焼き）の土瓶です。体部（ボディ）だけでなく、「Y」字になった取手まで全てが粘土から作られています。この土瓶を作った人は土器作りの達人だったのでしょうか、非常に薄く仕上げられています。

「ここまでやったんじゃけえ、取手まで作ってみるかのう。ほいじゃあ、鋳物職人の手を借りんでもええけんのお。」とでも言いながらせっせと作ったのでしょうか？ 断定するには至りませんが、近世の原村（現八本松町原）で焼かれていた「原村焼き」と考えられます。他の遺跡では見られないような職人技満載の独特な土器がたくさん出土しています。



写真6 出土遺物

写真6は、ゴミ捨て穴から見つかった遺物の一部です。左奥から「行平鍋」、「瓶」の底部、「碗」、中段左「碗蓋」・右「小皿」、下段左「灯明皿」、右「碗の底部」です。

中段左の「蓋」は一度こわれたらしく、鉛ガラスによる「焼き継ぎ」という補修が施されており、ものを大事にした様子が伝わってきます。大都市「江戸」では収集・運搬・廃棄というシステムが確立しており、尿尿処理やゴミ対策がなされていましたが、地方の宿場のひとつである四日市ではどうだったのでしょうか？

下段の2点は、それぞれ裏側の釉薬が掛かっていないところに「屋号」と考えられる文字が墨で書かれています。「仕出し」のようなことが頻繁にあったのでしょうか。

これからの四日市遺跡

四日市遺跡の発掘調査も、終盤にさしかかりました。そこで幾つか今後の課題をあげてみます。

- ① 四日市遺跡の起源は、中世の市場町なの？
- ② 宿場町と農村の明確な違いがあるの？



写真7 作業風景

③ 井戸や排水溝など土地利用の変遷は？

④ 建物は掘立柱？ 礎石？

⑤ 陶磁器や瓦の産地と時期、地元産の土器？
などですが、そのヒントのひとつが、写真7です。「夕暮れに染まる酒蔵」ではなく、方形区画の中に柱穴が並んでおり、溝を巡らせた建物跡の可能性があります。また、やや深い溝が横断していますが、その溝は江戸時代以降の石組排水溝です。2つの遺構の主軸はややずれており、方形区画は磁北を向いています。北を意識して作られた街から街道を意識して作られた街への変化と捉えることは出来ないでしょうか。

江戸時代は近くて遠い時代。まだまだ謎は多いようで、私たちの先人の暮らしの様子を容易には教えてくれません。その答えを皆さんといっしょに考えて行きましょう。

（石ガキ）

※不統一だった「絵図」の名称を「四日市街路家並絵図」に統一します。

（財）東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol. 28

発行日 2003(平成15)年11月21日

編集 財団法人東広島市教育文化振興事業団 文化財センター
発行 東広島市西条町大字馬木541-1
TEL 0824-25-3880 739-0033

印刷 電子印刷株式会社
広島市中区堺町1-1-5